



# この人を たずねて

関西学院大学文学部総合心理科学科 教授

## 三浦麻子氏

インタビュー  
平川 真

はTwitterでのやりとりで、「この人、面白い」と思って、何かのチャンスで一緒に何かできないかなあと考えたり、逆に「やりませんか」って声を掛けていただける、ということは結構ありますね。

——まず目的があって共同研究が始まるものと勝手に思っていたんですが、逆なんですね。「その人と何かを」ということなんですか。


人ベースでやっていますね。そもそもわたしは好きなことは勝手に自分でやって得意になるんですけど、苦手意識があることをある程度克服できたというのはぜんぶ人ベース。中学、高校のとき、数学も化学も苦手だったんですけど、先生がすごくタイプだったんですよ（笑）。好きだと思うと勉強を頑張っちゃう。物理の先生はあまり好きじゃなかったから苦手なまま、って感じなんですよ。

面白い人に会うと「この人と何か一緒にできるとしたら何だろう」と考える。さっき言ったように理論追究型ではまったくなくて、別にテーマは何でもいいんですよ。自分が興味持てて、面白いなと思ったら、それをやるので。

再現可能性の問題も、誰もなかなか手をつけないけど、誰でもやろうと思えばできますよね。で、そこにいろんな問題があって、難しいけどチャレンジしがいがある。いろいろな領域が絡むので、この人と何かやりたいな、と思っていた人と集いやすいつて側面もあるしね。

——再現可能性の問題に関して昔から思っていることがあったとか、そういう感じじゃなかったんですね。意外でした。

そう。これいけるな、って思うわけですよ。わたしの頭の中では、そこに旗とり競争みたいな旗が見えていて、パッとそれとる。サテイスファイスの研究もそんな



**Profile—みうら あさこ**

1995年、大阪大学大学院博士後期課程中退。博士（人間科学）。著書は『大学生のリスク・マネジメント』（分担執筆、ナカニシヤ出版）、『人文・社会科学のためのテキストマイニング』（共著、誠信書房）、『インターネット心理学のフロンティア』（共編著、誠信書房）など。

三浦麻子先生のwebサイト (<http://asarin.team1mile.com/>)にあるように、先生の研究のご関心は「コミュニケーションやインタラクションが新しい「何か」を生み出すメカニズムを解明すること」で、この課題にソーシャルメディアなどの大規模なログデータの内容分析や実験室実験、社会調査など、複数の方法論を組み合わせアプローチされています。近年は、心理学における実験結果の再現可能性やオンライン調査におけるサテイスファイス（協力者が調査に際して応分の注意資源を割かない回答行動）など、心理学全般に関わる問題にも取り組んでいます。

このようなアプローチの多様さ、研究関心の多様さということもあって、先生は多くの共同研究を実施され、まさに「他者とコミュニケーションをすることで新たな価値を生み出す」というご自身の研究関心を実践されています。今回のインタビューでは、「共同研究」をテーマにお話を伺いました。

### ■三浦先生へのインタビュー

——先生が実践として「共同で価値を生み出す」ということをされてきた理由を聞かせてください。

わたしは「いろんなことを整理して、高い視点で理解する」ということが苦手で、理論よりも実際にそこにある現象について、それが何を意味しているのかを考えるのが好きなんです。でも、それだと研究としては足りない部分がある。そういうときに、理論をちゃんと知っている、そういう人に近づくとか、データの分析にしても、統計学がこれまたひどく苦手なので、少し変わったアプローチで分析している人を見つけたり。自分が提供できるものと合わせたら面白いことができるんじゃないか、そう思っている人とか関わっています。

でも、別に何か明確に意識して人を探しているというわけではないんです。学会なんかに行くと、自分が苦手なこと、できないことを得意な人がたくさんいることを知ることができますよね。最近で



感じます。そういうときに旗をとりたい人だから。わたしのことをあまり知らない人は、なんか無茶苦茶に、手当たりしだいやっているように見えると思うんです。でも、まあ、やらないよりやったほうがいいかなって。

——新しい価値が創発される、という過程はすごく複雑なんだろうと感じています。何らかの新しい価値が生まれたときに、その現象を分析して、納得できる形で説明することは可能だと思うのですが、予測となるとかなり難しい気がします。そのあたりはどうでしょう。

そうね。「こうすれば新しい価値が創発する」というような単純なもの、おそらくないはず。こういう風にパラメーターを設定すれば必ず、というのは、まあシミュレーション的にはあるかもしれないけど、それを作り出すということは、統制しないといけない要因が多すぎて私たちの日常では難しいかな。ただ、はっきりと創発のメカニズムがわかるというわけではないけど、経験則というか、こうすればある程度うまくできるっていうのはありますね。

——ぜひ、その経験則を教えてください。

自分自身の共同研究の成果でもあるけど、共通の関心を持っているけど、ある程度違う観点から眺めているとか、違う手法を持っているとか、多少違う考え方を持っている人と一緒にやるのがいいかなとは思っています。そういう人を意識して探すって言えばそれがコツかもしれないけど、結果的に共同研究をする人はそういう人だということなんですけどね。

自分にはできないものや自分にはないものを持っている、けど話は合う、っていう人と知り合いになる。これはすごく大事。そういう人に出会うために、自分が面白

いと思ったことは積極的にシェアしていく。昔ならwebサイト、今だとソーシャルメディアで、研究室で身近な人としゃべっているような感覚で、いろんな人としゃべれるし。そういう場は貴重で、それこそ創発の機会みたいなものを与えてくれている。

——（インタビュー当日は三浦先生がセンター長をされている、関西学院大学社会心理学研究センター〔<http://www.kg-rcsp.com/>〕主催のwebサイト作成の講習会だったこともあり）どういうwebサイトを作ればいいですかね。

それはわからへん（笑）。まあ最低限、自分が何をやっているかがわかりやすいようなもの。誰かに役に立つような情報を提供できれば一番いいと思うけど……例えば、自分の使った尺度とか質問紙とか、すでに公刊した論文のデータとか関連資料とかを積極的に発信するとかね。作るなら出し惜しみしない。あと頻繁に更新すること。でも、「有益な情報をどんどん発信」とか意識してしまったらよくない。

——関西学院大学社会心理学研究センターについて教えてください。

やっぱり、わたしは自分が持っていない何かを持っているいろんな人と共同研究するのがすごく好きなので、それをしやすい場所を作りたい。今のところ、道徳という社会心理学の根源的なテーマを一つもってきて、いろんな領域からアプローチするプロジェクトを作りたいな、と考えています。

### ■インタビューを終えての感想

お話を伺って強く思ったのは、「面白いものは探すようなものじゃなくて、ふとした瞬間にたちあられてくるものだ」ということです。先生が「旗がみえる感覚」とおっしゃったのが印象に残っています。自分はこれまで「何か面白いテーマないかなあ」と、意識して面白いものを探していたし、最近自分が面白いと思うことよりも「他の人から面白いと言ってもらえるか」とか「お金をとってこれそうか」とか他人からの評価を考え、つつい面白く思われる研究の条件みたいな（ありもしない）ものを考えてしまっていました。「他人が何を面白いと思うかなんて考えてもしょうがない、自分が面白いと思ったことを一生懸命やるしかない」。頭ではわかっているつもりですが、なかなか。

三浦先生は、本当に「他者とコミュニケーションをすることで新たな価値が創発される」ということを体現していらっちゃって、お話の一つ一つが自分にとって新鮮で興味深いものでした。特に「自分が面白いと思っていることを他者と積極的に共有する」ことの重要性については、なるほどなあ!! と思いました。

自己紹介をするスペースがなくなっていました。webサイト作成の講習会で、「hirakawamakoto」(<http://mizunasu.net>)を作成しましたので、ご興味のある方はそちらでご確認いただければ幸いです。



#### Profile—ひらかわ まこと

2014年、広島大学大学院教育学研究科教育人間科学専攻博士課程後期修了。博士（心理学）。2015年より、広島大学大学院教育学研究科特任助教。専門は社会心理学、言語心理学。論文は「自己－他者配慮的目標が間接的要求の使用に及ぼす影響」（心理学研究）など。